

日本政府派遣チーム きょう到着、現地入り

深刻さを増すギマラス州での重油流出事故に対し、日本政府が派遣した海上保安庁職員三人、日本国際協力機構（JICA）職員一人からなる「国際緊急援助隊・専門家チーム」が二十二日、マニラに到着した。比政府は十七日、在比日本大使館を通じて、日本政府に支援を要請、二十一日に派遣が決まった。派遣チームは海上保安庁

警備救難部の塩入隆志環境防災専門官、同横浜機動防除基地の田中孝治主任防除措置官、田中公一防除措置官、JICAの山田好一国際緊急援助事務所次長。

同チームは到着後直ちに沿岸警備隊（PCG）本部で事故概況の説明を受け、二十三日朝、イロイロ州經由で現地入りする。

今回の支援活動は、現地での油除去作業の対応や機材の利用について評価、指導、助言を行うのが中心。滞在期間は、被害状況によつて変更するが、二十八日にマニラで比政府に調査結果を報告後、二十九日に帰国する予定。

日本政府は二〇〇二年から現行で「フィリピン海上保安人材育成プロジェクト」を実施、二〇〇三年には訓練用の油防除機材を無償供与していた。同プロジェクトでPCGに常駐している大久保隆洋アドバイザーは二十日、チーム派遣の前に現地入りし、PCGと共同調査、助言に当たっている。

メンドーサ運輸通信長官はこの日、日本政府派遣チームの他に、米沿岸警備隊から専門家二ないし三人が近く、マニラ入りすることを明らかにした。流出重油の除去と沈没タンカー引き揚げについての調査と評価を行うという。

PHIL. DAILY
Inquirer

8/24/04

INQUIRER



FOREIGN HELP. Japan Coast Guard Senior Response Officer Koji Tanaka aboard a Philippine Coast Guard ship looks out at sea on the way to inspect the oil spill around Guimaras Island Wednesday. Tanaka and two other Japan Coast Guard personnel were deployed by Tokyo to aid in the assessment of the cleanup operations. Japanese and US experts are helping efforts to contain the Philippines' worst oil spill.

AFP

Oil spill will degrade naturally

BUNKER OIL Oozing out of sunken tanker MT Solar I will degrade naturally, but the process will take a long time, a professor at the Marine Science Institute of the University of the Philippines Diliman said.

Dr. Nemesio Montaño said most of the fuel would settle at the bottom of the sea, where oil-degrading bacteria thrive. Once "chocolate mousse"—water-in-oil emulsion—is formed, however, the substance will be difficult to disintegrate, he said.

"Provided that the source of the spill is removed and the main cleanup is finished, it

will take two to three years for the remaining oil to break down," Montaño estimated.

The main cleanup of the Semirara oil spill—which, according to the Philippine Coast Guard, involved 364,120 liters of fuel—took about six months to finish. Solar I carried about 2 million liters of bunker fuel oil when it sank off Guimaras on Aug. 11.

A similar incident occurred in Great Britain a decade ago. In February 1996, oil tanker Sea Empress ran aground in Pembrokeshire, South Wales, spilling 72,000 tons of light crude oil and 480 tons of heavy fuel oil into the sea. The spill con-

taminated about 200 km of coastline.

The British government later said that just a month after the spill, concentration of oil in the water was already low because of the natural dispersion process.

Montaño said the speed of disintegration would depend on the temperature, the presence of oil-degrading bacteria, and the presence of nutrients that enable these bacteria to grow in number. These nutrients will help the process, but it will also encourage the growth of algae, which may cause a disturbance in the ecosystem, he said. *Cyril L. Bonabente, Inquirer Research*

困難な沈没船引き揚げ

日本の専門家チームが視察

重油流出事故

ビサヤ地方キマラス州沖で小型タンカー（九九八ト）が沈没し、重油が流出している問題で、日本政府が派遣した国際緊急援助隊・専門家チームは二十三日、比沿岸警備隊（PCCG）と共に重油流出現場を視察。その結果、①沈没海域が水深九百メートルでタンカー引き揚げは困難②流出量（約三十六万リットル）が大嵐③流出から約二週間経過し流出重油の粘着度が進行—などの状況を確認した。このため今後の重油除去作業への対応は困難を伴い、長期化する見通しが強まっている。

この日現地入りしたのは海上保安庁横浜機動防除基地の田中孝治主任防除措置官と日本国際協力機構（JICA）の山田好一国際緊急援助事務局次長ら計四人。専門家チームはイロイロ州でPCCGとの協議を終えた後、同日午後一時ごろからPCCGの船で重油ゆう出地点（北緯一〇・一六度、東経一二二・二八度）に向かい、油処理剤の適性テストを実施するとともに、油質などを分析するため流出重油の採取などを行った。田中主任防除措置官によると、流出規模は同地点では幅約二百五十メートルに及んでいるほか、タンカー

が水深約九百メートルの海底に沈んでいるため、流出防止措置を取れない状況という。また、流出拡大防止に最も有効な方法はタンカーの引き揚げ、あるいは船内に残っている重油の抜き取りとなるが、同措置官がこれまでに担当したケースでは、水深九百メートルからの沈没船引き揚げや同水深での油抜き取りを実施した経験はないという。同措置官によると、日本でこれまでに扱った油流出事故は五十件以上上るが、タンカーが沈没した例は極めて珍しいともいう。同措置官は「引き揚げるこ

とは技術的に不可能ではないと思うが、それには莫大な費用がかかるだろう」との見方を示した。さらに、今回流出した重油は粘着度が強く、防除作業が遅れることにより、さらに粘着度が増すことが懸念されるため、サンゴ礁やマングローブ林に付着した場合、除去作業は一層困難になるといふ。しかも、マングローブは傷つきやすく、機械を使えないため、除去が手作業となり、相当な人手が必要になるといふ。また、専門家チームは油ゆう出海域で、重油を分解させる油処理剤の流出重油との適性テストを行い、P

CGが現在除去作業に使っている油処理剤が有効であることを確認、今後も同処理剤の使用継続をPCCGに伝えた。油処理剤は油の粘着度を弱め、海岸などに漂着した重油の除去作業にも効果があるという。専門家チームは二十四日、イロイロ市の南東海域にあるギマラス島に向かい、流出重油が同島沿岸にどの程度漂着しているかなどを視察・調査する予定。同チームは今回の視察・調査結果を比政府に報告、除去作業の円滑化などに役立ててもらうことになっている。

「流出範囲の拡大見られず」

日本派遣チーム
視察終了 きょう、比側に報告

ビサヤ地方ギマラス州沖で発生した重油流出事故を視察・調査していた日本の国際緊急援助隊・専門家チームは二十七日、五日間に及んだ現地調査を終えてマニラに戻った。同チームは二十八日、油防除作業を行っている比沿岸警備隊（PCG）などの関係機関に調査結果を報告する。

同チームの日本国際協力機構（JICA）国際緊急援助事務局の山田好一隊長は、「期間中、上空視察を三日間行ったが、重油の流出範囲は拡大していないように見えた」と話し、流出重油は主にギマラス島（州）南西沖にとどまっているとの見方を示した。

今後の対策では、PCGなどが現在実施中の①油処理剤の活用②人海戦術による沿岸での漂着油除去――

が有効としている。

山田次長によると、油処理剤により油の漂着は比較的防げるため沿岸への被害は軽減される。また、人海戦術についても、チームが視察した沿岸では、地域住民約二十五人がマングローブなどの木々に付着した油の除去、砂浜に漂着した油の収集を行っていたという。同チームは各機関に同様の油防除作業を続けるよう促した。

日本政府は比政府の要請を受け、現場での油除去作業の対応や機材の利用について評価、指導・助言を行うため、海上保安庁三人、JICAから一人の計四人を派遣している。

一方、上院は二十八日、水質問題に関する合同監視委員会の公聴会を開き、今回の重油流出事故の調査に乗り出す。公聴会に

はペترون社長、ギマラス州知事、国家災害対策本部長、環境天然資源長官、沿岸警備隊幹部を召喚している。

ルソン島バタアン州からミンダナオ島サンボアンガ市に向かっていたタンカー「ソーラー」（九九八トン・重油二千キロリットル積載）は今月十一日、ギマラス島南端から約二十キロ沖合のギマラス海峡を通過中、大波を受けて浸水、沈没した。乗組員二十人中、二人が行方不明となった。被害は同州の二十六、バランガイ（最小行政区）、住民一万七千四百三十五人に及んでいる。

日本援助隊が沿岸視察

除去作業は人海作戦に

重油流出事故

ビサヤ地方ギマラス州沖で起きた重油流出事故で、比政府の要請を受け日本から派遣された国際緊急援助隊・専門家チームは二十四日、現場近くのギマラス州沿岸を海上から視察、油除去作業を迅速に進めるには人海作戦が必要だと述べた。

海上保安庁横浜機動防除基地の田中孝治主任防除措

置官によると、重油が漂着した沿岸部には流出したとす黒い油が砂浜やマンングロープにべったり張り付き、アスファルトの焦げるような匂いがしていたという。住民らが除去作業を行っており、作業が終わった海岸の沖合にはオイルフェンスが張られた地域もあった。同主任は沿岸部の油除去作業は、人海作戦になり、効

率化するには作業員の確保が重要。しかし動員人数が増えればマンングロープなどへの悪影響も懸念される。また、除去作業は炎天下での作業になるため、作業員の健康などに配慮する必要があると指摘した。

国際緊急援助隊・専門家チームは二十二日、来比し二十三日に現地入りしていた。二十五日は関係機関との打ち合わせ会議後、比沿岸警備隊のヘリコプターで空から油流出の規模を調査する予定。